

特別支援向けネットコミュニケーションスキルの 育成に関する実践研究

ーネットトラブルを防止するための「静岡モデル」の構築と普及ー

(研究代表者)

静岡大学 教育学部

准教授 塩田 真吾

研究の概要と成果：

特別な支援を要する子どもにとって、インターネットは有効な情報入手の手段であるが、ネットの被害者・加害者にもなる可能性がある。本研究では、そのようなトラブルを防止するための情報モラルの指導方法として「静岡モデル」を構築、それに基づく教材開発と実践を通して評価を行った。

「静岡モデル」とは、ソーシャル・スキル・トレーニング（SST）の知見と、酒井ら（2016）のカード分類比較法の手法を援用した指導方法である。SSTの流れに沿って繰り返しの指導を取り入れ、スキルの獲得を目指すとともに、カード等を用いた他者とのコミュニケーションを通して「気づき」を得ることも期待される。

このモデルを用い、「SNSでの写真の公開」「テキストコミュニケーション」「長時間の利用」をターゲットとして3つの教材開発を行った。開発した教材を県内の特別支援学校において実践したところ、学習内容の理解や定着が見られ、本教材の効果が明らかとなった。

今後の課題と研究展開として、「静岡モデル」を用いた新規の教材開発を進めるとともに、知的障害の認知特性やトラブル要因の整理等を詳細に行ったうえでの本モデルの検討を行うことが求められる。

特別支援向けネットコミュニケーションスキルの育成に関する実践研究

ーネットトラブルを防止するための「静岡モデル」の構築と普及ー

塩田真吾¹⁾・香野毅¹⁾・松永由弥子²⁾・橋爪美咲³⁾・良知史織¹⁾

静岡大学教育学部¹⁾・静岡産業大学情報学部²⁾・静岡大学大学院教育学研究科³⁾

1. はじめに

近年、特別な支援を要する子どものネットトラブル事例が報告されている。文部科学省(2010)は障害の特性に起因するネットトラブルの可能性について、「知的障害があるために、文面の意味を読み間違えて被害者になったり、逆に犯罪に巻き込まれて気付かないうちに加害者になったりするなどの場合がある」と指摘している。

しかし先行研究を概観すると、渡辺・原田(2015)などのネットいじめの予防を目的とした中高生を対象としたソーシャル・スキル・トレーニング(SST)に関する実践や中筋(2017)などの特別支援教育における情報モラル教育の実践は見られるものの、特別な支援を要する子どもを対象にしたSNSでのコミュニケーションスキルを題材とした研究はほとんど見当たらない。

そこで本研究では、特別な支援を要する子どものうち、特に知的障害のある子どもを対象としたネット上のコミュニケーションスキルを育成するトレーニングモデルとして静岡モデルを構築し、特別支援学校高等部における実践を通し、教材やモデルの評価を行った。

2. 教員を対象とした予備調査の分析

まず、知的障害者の情報機器利用における困難やトラブル事例、特別支援学校の教員が求める情報モラル教育教材のニーズの把握のため、2019年6月に静岡県内の各特別支援学校の教員1名ずつ、計37名を対象としたアンケート調査を実施した。

はじめに、各学校での今年度の情報モラル教育の実施概要について調査を行った。情報モラル教育の実施予定については、78.4%の学校が「実施する予定がある」と回答している。しかし、主に授業を担当する者について、実施予定がある学校の77.3%で「外部講師」であり、学校の教員が実施している例は少ないことが明らかになった。また、指導形態については、授業として指導をしている学校が6割を超える一方、「生活指導として実施」という回答も27.3%存在していた。これらのことから、各生徒の状況や実態に合わせた柔軟な対応ができると推測される各学校の教員が手軽に扱えるような教材パッケージである必要性が示唆された。

次に、「これまでに聞いたことのある情報機器の利用に関するトラブル事例」について調査を行った。高等部でのトラブル事例として多く挙げられたのは、「悪口」19件、「悪ふざけの投稿」18件、「使いすぎ(時間)」「ネット上での出会い」各16件であった(図1)。また、小中学部の事例と比較して高等部で特徴的だったのが「個人情報流出」6件、「使いすぎ(金銭)」15件であった。低年齢では情報を「みる」ことに留まるのに対し、高等部では情報を「やりとりする」こと

が増えること、また、年齢が上がり自由に使える幅が広がることにより、トラブルの質も年齢とともに変化していると考えられる。

さらに、「高等部で必要だと考える指導内容」について、上位3項目を選択式で回答を得た。回答の多い項目は「悪口」23件、「個人情報保護」18件、「ネット上の出会い」15件であった(図2)。また、高等部に特徴的な回答として「社会的マナー」7件が挙げられる。高等部段階では、学校の教育活動全体として、高等部卒業後の就労や社会生活を見据えた指導を行っている。そのため、情報モラルの指導においても同様に、将来の社会生活に根差した指導を行う必要があると推察される。

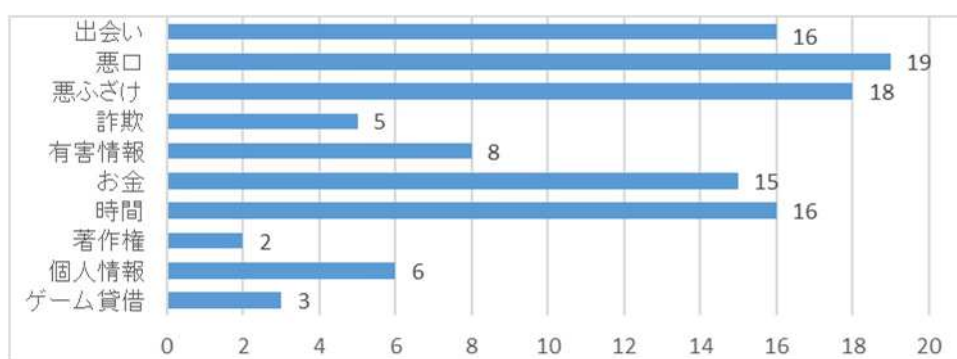


図1 これまでに聞いたことのあるトラブル事例 (高等部)

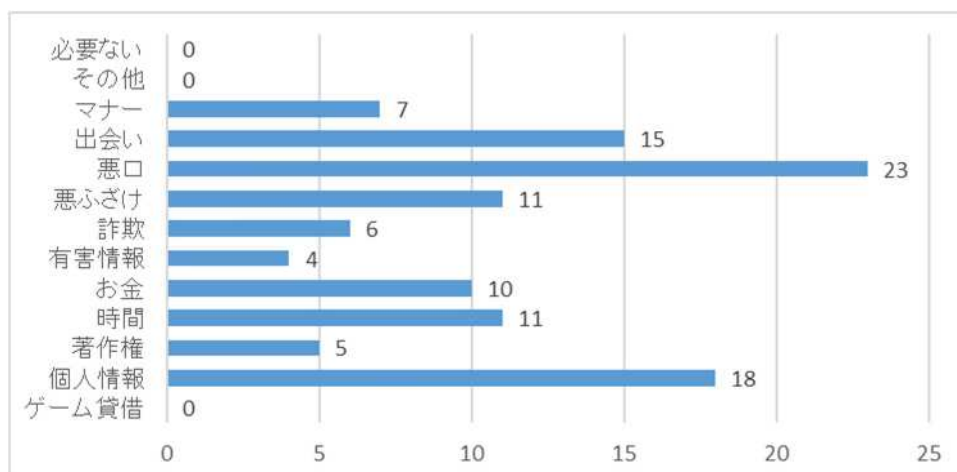


図2 知的障害のある子どもに必要なと思う指導 (高等部総計)

3. 「静岡モデル」の開発

「静岡モデル」の開発にあたり、2つの理論を援用することとした。

まず、社会性や対人関係能力を身に付けさせるための手法として、「ソーシャル・スキル・トレーニング (SST)」が挙げられる。佐藤 (2005) は、ソーシャル・スキルは学習性のものであるとし、対人関係の困難さを改善・克服するには、学習によってそれらを身に付ければよいと

述べている。また、佐藤は、ソーシャル・スキルを「観察できる具体的な行動」として捉え、行動レベルで学ばせることを提唱している。知的障害のある子どもの指導の際には、学習した内容を実生活の中で生かすために、「実際の生活場面に即しながら、繰り返して指導する」ことが有効であるとされており（文部科学省、2018）、SSTのように具体的な行動として指導することは一定の効果が得られると考えられる。なお、SSTの一般的な流れは、①インストラクション（説明）、②モデリング（行動の観察・気づき）、③ロールプレイ（実行・体験）、④フィードバック（動機付け・修正）⑤チャレンジ（授業外での実践・般化）である（渡辺、2018）。

また、情報モラル教育のうち、子どもがSNSの「使い方」やそこで求められる「スキル」に注目しながら思考できる指導方法として、酒井・塩田・江口（2016）は、カードを用いた分類・他者との比較を行う方法（カード分類比較法）を提唱している。酒井らによると、この方法を用いることで子どもたちが自己のSNS利用におけるコミュニケーションの問題点を把握し、トラブルを自覚することができるという。さらに、知的障害のある子どもにカードを用いる場合、カードによって考えが視覚化されることで自分の意見を確立したり、他者と比較する際に考え方の違いが明確になり、思考を深めたりできると予想される。そのため、本教材においてもカードを用いた分類や他者との比較を行い、思考を深めながらコミュニケーションスキルを獲得できると考えられる。

以上2つの理論を援用し、特別支援教育における情報モラル教育のためのスキームとして、以下のような「静岡モデル」を開発した。

- ①スキルの提示・SNSの仕組み・実践のメリット・ポイントなどを場面と合わせ具体的に説明する [インストラクション, モデリング]
- ②カード教材を用い、自分の考えをまとめたり、他者とのコミュニケーションを図ったりすることで思考を深める [ロールプレイ]
- ③機材を用いた活動、クイズ等から、スキルを活用したネット・SNSの利用を体験的に学ぶ [ロールプレイ, フィードバック]

4. 「静岡モデル」に基づく教材開発

上記の「静岡モデル」を用い、教材の開発を行った。教材化したテーマは、教員への予備調査のうち、トラブル事例や教材内容へのニーズの項目の結果をもとに、トラブルが実際に起こってしまった場合の被害の大きさ等も考慮し、「SNSへの写真の投稿場面における個人情報保護に関するスキル」（以下、「写真の公開」編）、「SNSでのテキストコミュニケーションにおけるスタンプ活用のスキル」（以下、「コミュニケーション」編）、「長時間利用や過度の課金等、使いすぎを自律的に防ぐスキル」（以下、「使いすぎ」編）とした。

4-1. 「写真の公開」編

本テーマの教材のねらいは、「SNSの種類や特性についての理解を深め、『公開してよい写真』・『公開してはいけない写真』を分類したり、写真を撮影したりする活動を通して、SNS利用において自己や他者の個人情報を保護しようとする態度を養う」である。

本テーマでは、5枚の写真カードを2セット開発した(図3・図4)。これらのカードを用いて「たくさんの人が見るSNS(Twitter, YouTube等)に公開してもよい」、「決められた人だけに送ってもよい」、「SNSに公開しないほうがよい」という3つに分類する活動を行い、事前に説明した写真の公開範囲についての理解を深めることができるようにした。



図3 「写真の公開」編で開発したカード・ワークシート(1組目)

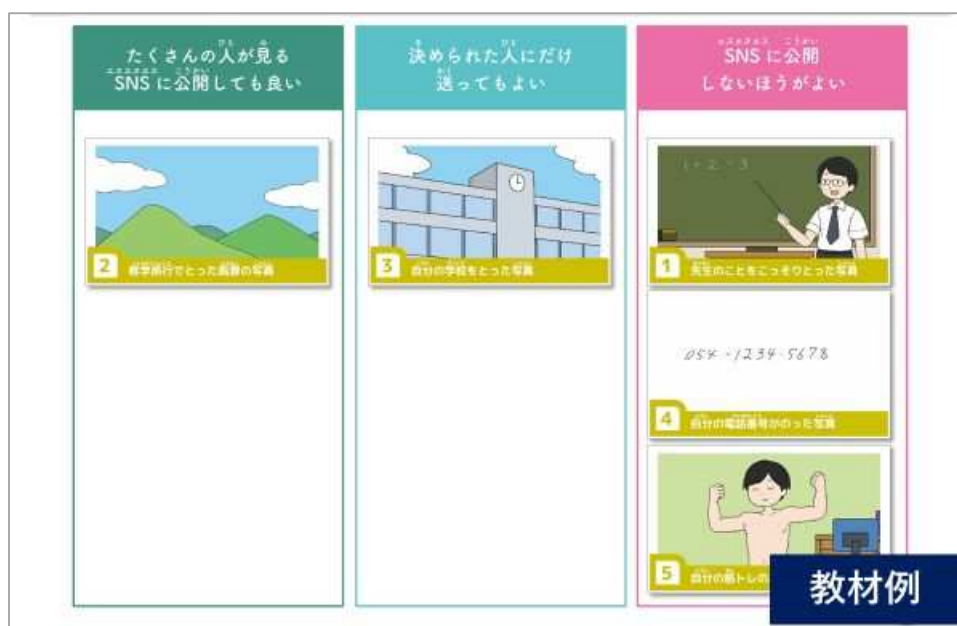


図4 「写真の公開」編で開発したカード・ワークシート（2組目）

さらに、実際にタブレット端末を用い、「たくさんの人が見るSNSに公開してもよい写真」を撮影する活動を取り入れ、思考を深めることに加え、学習内容を般化させることを狙った。実際に撮影し、学習集団（班・クラス等）の中で発表することで、撮影のポイントを自分で考えることができるだけでなく、他者からの指摘を受けることで、より実際の生活に近い形での理解が可能であると考えられる。

教材に添付した指導案は、以下の通りである。

時間	学習内容	SST としての位置づけ
5分	<p>1. 写真の公開から起こり得るトラブルについて考える</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の、普段の SNS 利用について振り返る。 友人に無断で SNS に写真を公開したことに起因するトラブルについて考える。 	インストラクション・モデリング
10分	<p>2. SNS の種類やそれぞれの特徴の紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> 「たくさんの人が見られる SNS」と、「決められた人だけが見られる SNS」を紹介し、その危険性を説明する。 	
20分	<p>3. 「写真を公開してもよい範囲」について考える</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>それぞれの SNS に公開してもよい写真とは、どんなものだろうか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 5 枚のカード(写真)を 3 つに分類する(個人) 	ロールプレイ・フィードバック

	<ul style="list-style-type: none"> ・ペアやグループで分類を検討した後、正解の発表と解説を行う。 	
10分	<p>4. 「SNSに公開してもよい写真」を撮影する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「たくさんの人が見る SNS に公開してもよいと思う写真」をタブレットで撮影する。 ・全体で撮影した写真を見合い、話し合う。 	
5分	<p>5. 本時のまとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ SNS を使う際には、「誰が見ているかを考えながら SNS を使い分ける」ことをおさえる。 	

4-2. 「コミュニケーション」編

本テーマの教材のねらいは、「『言われて嬉しい言葉・嫌な言葉』を分類し、他者と比較することを通して、自分と他者では感じ方に違いがあることに気づく」と、「SNSでのコミュニケーションの特徴に関する理解を深め、スタンプの意味や意図を考えることを通して、相手や状況に応じて、適切にSNSを活用しようとする態度を養う」の2つを設定した。

本テーマでは、4枚の言葉カード（「まじめだね」などの文字のみが書かれたカード）を開発した（図5）。このカードを用い、それぞれの生徒が自分の感覚をもとに「うれしい言葉」「イヤな言葉」に分類する活動を行う。その後、各自が分類したカードを他者と比較し、人によって言葉から受ける印象や感覚が異なることや、文字だけでは気持ちが伝わりにくいことを体感的に理解できるようにした。なお、分類に用いるワークシートでは、「うれしい」「イヤ」という感覚をそれぞれイメージしやすいよう、表情のイラストを併せて載せた。

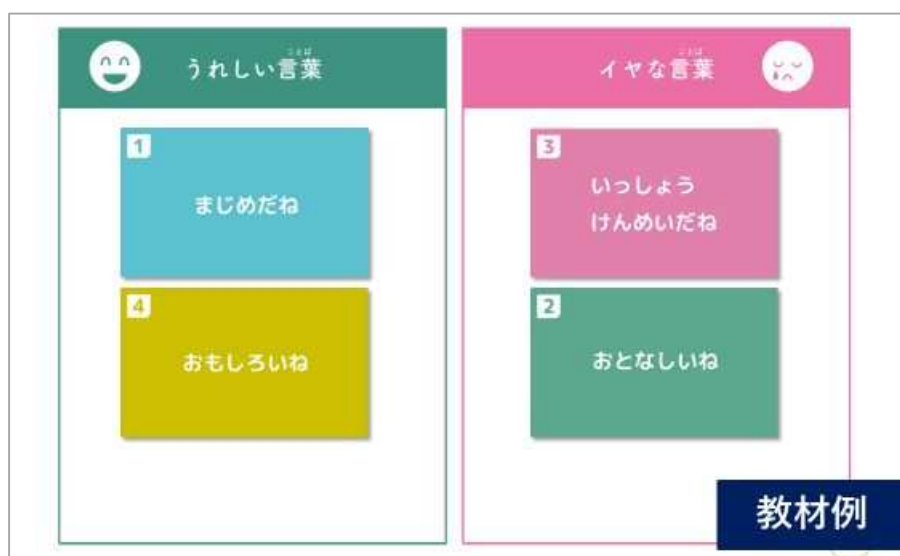



図5 「コミュニケーション」編で開発したカード・ワークシート

その後、SNSでメッセージをやりとりする際には、文字だけでは伝わりにくい自分の感情をうまく伝えるため、スタンプを活用することが有効であることを説明し、クイズ形式で適切なスタンプの利用について考える場面を作った（図6、図7）。この活動を通して、スタンプを送ってきた相手の気持ちの理解と、自分が相手にそのスタンプを送った場合の相手の気持ちを考えることができるようにした。

つか かた まな
スタンプの使い方を学ぼう

教材例

このスタンプは、A・B・Cの
きも あらわ
どの気持ちを表しているだろう？



ひと
人によって
かん かた
感じ方がちがう
スタンプもあります

A：すごくおもしろかった気持ち
B：ちょっとだけおもしろかった気持ち
C：バカにした気持ち

図6 「コミュニケーション」編で開発したスライド例（1）

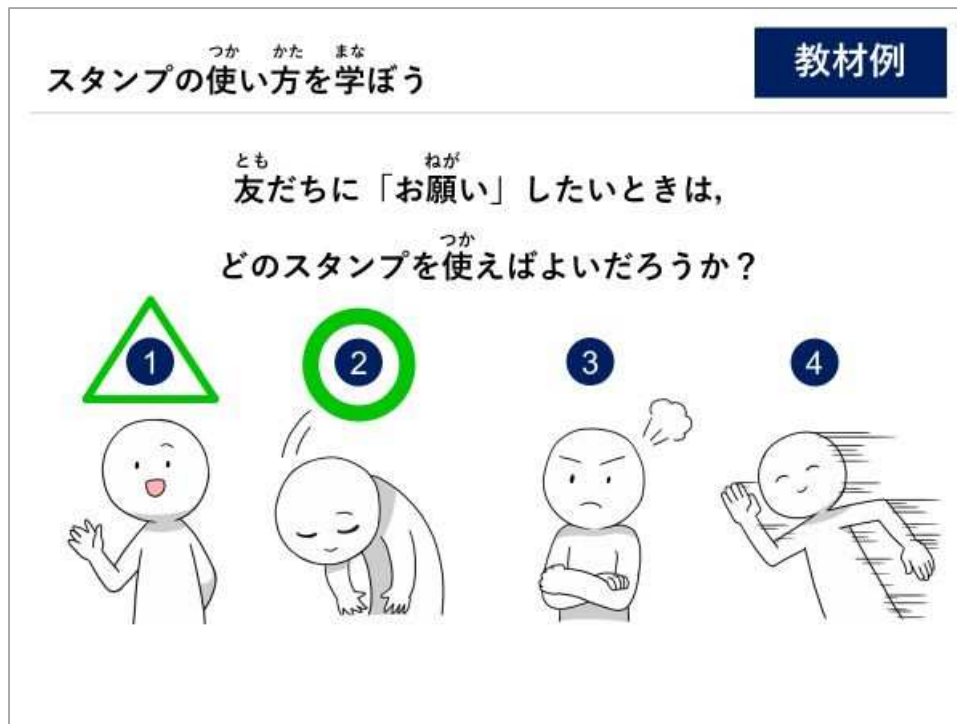


図7 「コミュニケーション」編で開発したスライド例 (2)

教材に添付した指導案は、以下の通りである。

時間	学習内容	SST としての 位置づけ
15 分	<p>1. 「自分と相手の違い」を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の、普段の SNS 利用について振り返る。 ・「言われてイヤだと感じる言葉」をカードで選択し、他者と比較して感じ方の違いを考える。 	インストラク ション・モデ リング・ロー ルプレイ
5分	<p>2. SNS でのコミュニケーションの特徴についての紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・直接会う対人場面に比べ、SNS では表情が見えず気持ちが伝わりづらいことを説明する。 ・SNS 上で気持ちを伝えるためには、スタンプが効果的であることを説明する。 	インストラク ション

15分	<p><u>3. スタンプの意味や選び方について考える</u></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>自分の気持ちや相手に応じて、どのようなスタンプを選んで送ればよいのだろうか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれのスタンプの使われる意図を考え、話し合う。 ・場面に応じて使うスタンプを選択し、そのスタンプを使うと相手がどんな気持ちになるか話し合う。 	ロールプレイ
10分	<p><u>4. 場面に応じたスタンプの使い方について考える</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校を卒業後、会社などにおける上司や先輩との SNS のやりとりで気を付けるべきことを考える。 ・返信がないときなど、やりとりが自分の思い通りにならないとき、どのように振る舞うべきか考える。 	モデリング・ロールプレイ・フィードバック
5分	<p><u>5. 本時のまとめ</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・SNS でのコミュニケーションの特徴を確認する。 ・気持ちを伝えるのにスタンプが効果的であることをおさえる。 	

4-3. 「使いすぎ」編

本テーマの教材のねらいは、『使いすぎだと思うこと』カードの分類や、前日の行動を振り返るタイムシートの作成・比較を通して、使いすぎの感じ方は人によって異なることに気づき、『自分に合った使い方』を考える」と、「SNSの使い方の目標や工夫を自分で選択し継続して取り組む活動を通して、自分で決めた目標や工夫を守ろうとする態度を養う」の2つを設定した。本テーマでは、先述の2テーマと同様、カード教材を用いたワークだけでなく、生活グラフの作成や目標・工夫の設定、授業後1週間を通した実践と振り返りまでを1つの教材パッケージとした。

まず、カード教材についてである。カードには、やや使いすぎの傾向が見られる事例を4つ取り上げ、イラストと共に記載した(図8)。それらを「使いすぎだと思う」「使いすぎではないと思う」の2つに各自分類した後、「コミュニケーション」編のカードワークと同様、他者との比較を通して、「使いすぎ」の感覚は人それぞれであることを理解するとともに、自分が「使いすぎではない」と思っている、他者から見たら「使いすぎ」と認識されてしまう可能性があることを理解できるようにした。

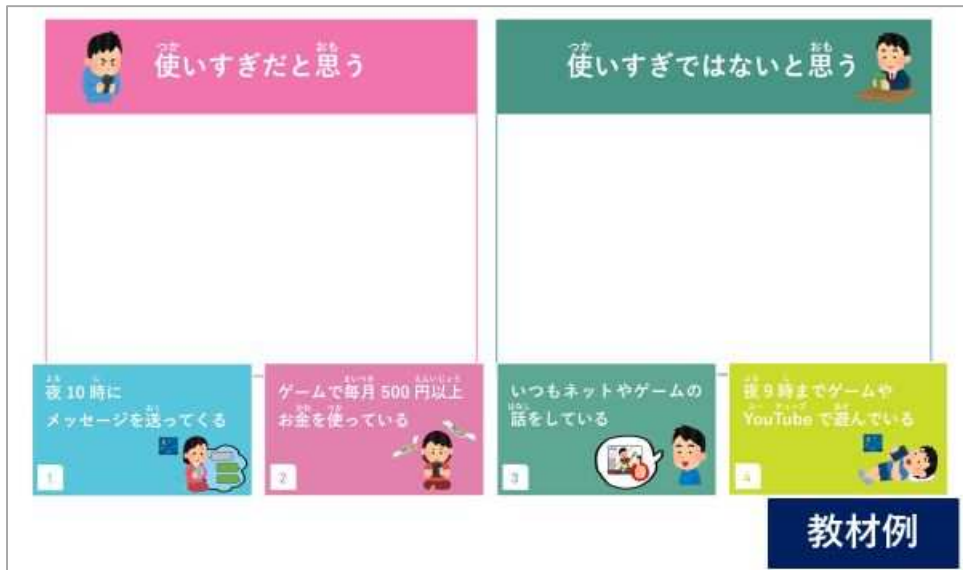


図8 「使いすぎ」編で開発したカード・ワークシート

次に、酒井・塩田（2018）のインターネット依存への自覚を促す教育手法に関する先行研究に基づき、自分のスマートフォン等の利用時間や利用内容を振り返る「生活グラフ」の作成を、ワークシートを用いて行った（図9）。スマホ等の利用時間を赤色、それ以外の余暇活動を行った時間を青色で示すことにより視覚的に利用時間を理解できるようにし、自分だけではなく他者の描いた生活グラフと比較することで、自分の状況について再検討させるようにした。

自分のスマホなどの使い方を振り返ろう

教材例

昨日、どのくらいの時間スマホを使っていたか
1日の生活を思い出しながらかえてみましょう！

ねる				スマホ		ご飯		学校				スマホ		ご飯		おふろ		スマホ		ねる				
12時	1時	2時	3時	4時	5時	6時	7時	8時	9時	10時	11時	12時	1時	2時	3時	4時	5時	6時	7時	8時	9時	10時	11時	12時
夜					朝					昼					夜									

③ スマホやタブレット、パソコン、ゲームを使っていた時間をかき、赤の色鉛筆で塗ります。
(使っていない人は、書かなくていいです。)

図9 「使いすぎ」編で開発した生活グラフの作成に関する説明用スライド

さらに、生活グラフの作成を通して明らかになった自己のスマホ等の利用に関する課題をもとに、使いすぎを防ぐための「目標」や、設定した目標を達成するための「工夫」を自分で設定させた。それぞれを設定するための支援ツールとして各2種類のシールを開発し、空欄に自分で設定した時間や他の活動を記入することで、生活を自己管理し自律的な行動ができるようにした。



図10 「使いすぎ」編で開発した目標・工夫設定用シール

教材に添付した指導案は、以下の通りである。

時間	学習内容	SST としての位置づけ
10分	<p>1. 「使いすぎ」の感じ方の違いを捉える</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の普段のネット・SNS 利用や、学校・家庭での使用ルールについて振り返る。 「使いすぎだと思うこと」をカードで分類し、他者と比較して、使いすぎの感覚の違いを考える。 	インストラクション
5分	<p>2. 使いすぎによって起こる問題を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ネット・SNS は上手に使えば便利である一方、使いすぎると健康や日常生活でトラブルが起こったり、相手に迷惑が掛かってしまったりすることもあることを学ぶ。 	インストラクション・モデリング・ロールプレイ

15分	<p>3. 普段の「自分の使い方」を振り返る</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>自分の生活を充実させるためには、どんな「使い方」をすればよいだろうか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・昨日1日の過ごし方を振り返るタイムシートを記入し、どのくらいの時間スマホなどを使っていたか確認する。 ・タイムシートを他者と比較し、使っている時間や時刻などから、自己の課題を考える。 	
15分	<p>4. 使いすぎを防ぐための目標や工夫の仕方を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現状・課題をもとに、「使用時間を減らす」「他のことをする時間を増やす」から、目標を選択する。 ・「減らす時間」や「やりたいこと」を決める。 ・目標を達成するための工夫の仕方を学ぶ。 ・1週間の実践の取り組み方を確認する。 	モデリング・ ロールプレイ・フィードバック
5分	<p>5. 本時のまとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・使いすぎの感じ方には違いがあり、迷惑になることもあることを確認する。 ・使いすぎを防ぐとより生活を充実させることができることをおさえる。 	

5. 開発した教材を用いた授業実践と分析

これらの「静岡モデル」に即して開発した教材を用い、2019年7月から12月に、県内6つの特別支援学校において、延べ263名の生徒を対象に授業実践を行った（「写真の公開」編：2校・計73名、「コミュニケーション」編：4校・計142名、「使いすぎ」編：2校・計48名）。授業者は静岡大学（大学院）の学生2名・教員1名の計3名が行い、授業者が各校を訪問し授業を実施した。なお、本実践及びそれらで得た記録等は研究に用いる旨を事前に本人・担当教諭らに伝え、了承を得た。

授業時には、分析のため、生徒を対象としたアンケート・確認テスト・教員アンケート（含：ヒアリング）・授業内での発話記録を行った。

まず、授業後のアンケート結果である。ある学校のアンケート結果を見ると、「授業のわかりやすさ」の項目（図11）では、作業負荷が多い「使いすぎ」編においても「わかりにくい」と感じていないことから、全体的に適切な作業量の設定ができていたと考えられる。しかし、「写真の公開」編において「わかりにくかった」と回答している2名は現在スマホ等の利用がない生徒であったことから、情報機器の未所持者でも理解できるための手立てが必要であることが示唆された。また、「授業内容の有用感」の項目（図12）では、全体的に高値であることから、高等部を卒業後の生活や活用についての内容を扱ったことで「生活に役立つ」と感じさせることができ

たとえられる一方、「使いすぎ」編に見られる「役に立たない」という回答をした生徒は、授業以前から利用時間が長く問題傾向のある生徒であり、授業内で「使いすぎがよくない」ことを認識させることができなかつた様子であることから、特に使いすぎの傾向にある生徒に対しては、カードワークや生活グラフを通した他者との交流をより充実させ、使いすぎへの自覚や問題意識を持たせる必要があると考えられる。

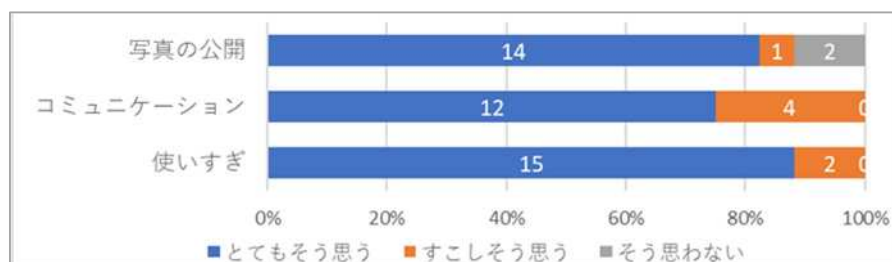


図11 事後アンケート「今回の授業はわかりやすかったですか？」

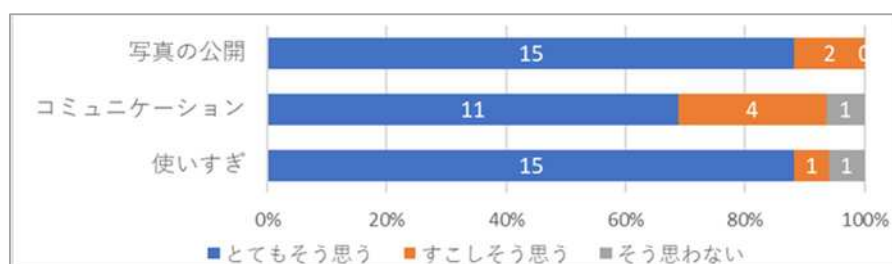


図12 事後アンケート「今回の授業内容は今後の生活の役に立つと思いますか？」

次に、学習定着度を見るための確認テストについてである。確認テストは、「写真の公開」編と「コミュニケーション」編の学習内容について、授業直後と1か月後に同様の問題を提示し、解答や正答率の変化をもとに分析を行った。

「写真の公開」編の確認テストの結果を見ると、「変化なし」の生徒が多数であることから、本教材を通した学習内容の定着が明らかになった。ただし、変化があった生徒については下降傾向がやや見られることから、クローズドなSNSとオープンなSNSでの公開範囲の違いやリスクの違いに関する理解が抜けてしまった可能性が考えられる。インストラクションの段階における、より焦点化し、要点を絞った説明が求められるだろう。

「コミュニケーション」編の確認テストでは、「写真の公開」編と同様、正答率に大きな変化は見られず、学習内容は定着していると考えられる一方、授業で扱ったスタンプでの正答率が90-100%であるのに比べ、授業では扱っていないイラストのスタンプでの正答率が76.9%とやや低いことから、授業内で学習したイラスト以外のスタンプが提示された場合、本授業で学習したことが生かされない可能性があることが示唆された。

「使いすぎ」編は学習内容が生活に生かされているかを確認するため、授業1週間後に追跡ア

ンケートを実施した。1週間を通してスマホ等の利用時間を減らすことができた生徒は8割程度であり、本教材を用いた取り組みの効果が示された。また、授業実施前と授業の1週間後に実施した、スマホの利用時間削減に関する意識調査についてt検定をかけたところ、有意差は見られないものの効果量が中程度を示し(表1)、授業や1週間の実践を通して、スマホやネット等の利用時間を減らすことの必要性を実感することにつながるようになった。

表1 利用時間削減の必要感に関する事前・追跡の平均値の比較

事前	追跡	p 値	Cohen's d
2.07 (0.88)	2.47 (0.74)	0.054	-0.51

**p<0.01, *p<0.05 ()はSD

6. 本研究の成果と課題

本研究の成果は、「静岡モデル」に基づく3テーマの教材開発・実践により、学習内容の理解の促進や定着に効果が見られたことである。この「静岡モデル」は、今後、特別支援教育における情報モラル教育に関して、他テーマの教材開発においても援用可能であろう。なお、本研究の成果は静岡県内特別支援学校での実践を重ねるとともに、Webや書籍を通して全国的に普及していく予定である。

一方、本研究の課題としては、高等学校と特別支援学校(高等部)での比較検討が不足しているため、ややユニバーサルデザイン的な教材となっており、知的障害特有のトラブルの背景に迫っていない可能性があることである。性格・認知特性などとトラブル事例を両方の学校に調査し、それらを比較・分析することを通して、知的障害のある人により適した内容や教材形式を検討していくことが必要である。

参考文献

- ・文部科学省(2010)「特別支援教育における教育の情報化」、『教育の情報化に関する手引き』, pp.194-222
- ・渡辺弥生・原田恵理子編(2015)『中学生・高校生のためのソーシャルスキル・トレーニング—スマホ時代に必要な人間関係の技術—』, 明治図書
- ・中筋千晶(2017)「特別支援学校における情報モラル指導用教材の開発とその実践的検証」, 第43回全日本教育工学研究協議会全国大会
- ・佐藤正二(2005)「ソーシャルスキル教育の考え方」, 佐藤正二・相川充編『実践! ソーシャルスキル教育 小学校編—対人関係能力を育てる授業の最前線—』, 図書文化社, pp.6-15
- ・文部科学省(2018)「特別支援学校学習指導要領(平成30年3月告示)解説 各教科等編(小学部・中学部)」, 開隆堂

- ・渡辺弥生 (2018) 「道徳性の発達とネット社会に求められる教育」, 西野泰代・原田恵理子・若本純子編『情報モラル教育—知っておきたい子どものネットコミュニケーションとトラブル予防』, 金子書房, pp.39-54
- ・酒井郷平・塩田真吾・江口清貴 (2016) 「トラブルにつながる行動の自覚を促す情報モラル授業の開発と評価—中学生のネットワークにおけるコミュニケーションに着目して—」, 日本教育工学会論文誌39 (Suppl), pp.89-92
- ・酒井郷平・塩田真吾 (2018) 「中学生を対象としたインターネット依存傾向への自覚を促す情報モラル授業の開発と評価—子ども自身による『インターネット依存度合い表』の作成を通して—」, コンピュータ&エデュケーション44, pp.42-47

学会発表

- ・香野毅・橋爪美咲・塩田真吾(2019) 「特別支援学校高等部向け情報モラル教育教材の開発と評価—SNSでのコミュニケーションスキルに着目した試行的実践—」, 日本特殊教育学会第57回大会
- ・ Misaki Hashizume, Takeshi Kono, Shingo Shiota (2020), *Developing and Evaluating Teaching Material for Information Technology Moral Education for High School Students with Special Needs*, 2020 International Conference on Advances in Education and Information Technology